第33号 ながえの里だより（2017年秋号）平成29年11月1日発刊 庄原同仁病院広報新聞委員会 庄原市川北町890-1 0824(72)7300

日本医療機能評価機構 認定病院
庄原同仁病院
広報誌 第33号
発行 庄原同仁病院広報新聞委員会
〒727-0203 庄原市川北町890-1
Tel:0824-72-7300 Fax:0824-72-7333
e-mail doujin@sweet.ocn.ne.jp
URL http://nagaekai.com/

間を考える

院長 村尾 文規

人の間と書いて人間。時間的にも空間的にも間合いを考えないと不快感を与えかねないが、間には境界がないだけに厄介である。絶妙なタイミングで間が現れれば、その瞬間に愉悦に浸るほど素敵な時間になるかもしれないのだ。間は注目に値するものだ。何よりも会話は相手に理解されなければ意味がない。ただの無駄話になる。会話には間が大切だ。

間とは、物と物、事と事の間。芝居では余韻を残すために台詞と台詞との間に置く無言の時間とある。私たちは、この間に思いをめぐらす。予想通りの展開のことも、全く意に反する結果もあろう。このわずかの時間は、豊かで贅沢な時間となり得るはずだ。つまり、相手の立場にたつことも、対立することも、意のままであるからだ。この場合、間がどのタイミングで現れるかで、展開は大きく変わる。間を期待し、そのタイミングに注目するのも一興である。間は予期せぬとき出現し、追いかければ逃げてしまう。教えることのできないものらしい。それ故に、この種の間を『魔』という字を当てるのだそうだ。それほどまでに厄介な『間』を追いかける。追いかけるにたる魅力がある。北野 武の著書を引くと、漫才ではボケと突っ込み役があり、突っ込み役が芸の司令塔にならないと笑いがとれないらしい。突っ込み役が、間をコントロールする役目を担っている。練習と場数を踏むといつの間にかコツをつかむことができるという。当然のことだが、日頃の、あらゆる場面で訓練しているのであろう。話すということは、相手にその趣旨を理解してもらうという使命を帯びている。完遂するために、話し手は、間を考えること、聞き手は、相手の立場に立って聴くことが求められる。

翻って、私たちは、日常の会話や仕事のなかで、どの程度、「間」をとっているのであろうか。便利さを追求してやまない昨今、あらゆる情報は手中にある。何事も考える暇を与えず、即断、即決、時を移さず結果を求めるような風潮になっている。風潮に逆らって、「間を取ること」を考えてみては如何か。ふっと息を吐く間、この瞬間に注目したいのである。その一瞬は、心の中で葛藤が生まれることも、胸をおどらせることもある。演出家の森田雄三氏はコミュニケーションでは、内容より、むしろ間が大切だと主張する。

間は魔である。不思議な力を借りて会話がはずむこともあろう。人生の間の取り方を会得する機会にもなるかもしれない。まずは、よく聴くことだ。
饒舌か傾聴か一線を引くのは自分自身である。

基本理念

わたくしたちは、すべての人に等しく
仁愛の精神をもって接し、
心の通う医療の実践に努めます。

基本方針

患者様の満足：常に患者様の立場に立って行動します。
職員の満足：働きやすく、やりがいのある職場づくりに努めます。
地域の満足：医療サービスを通じて地域の方々に喜ばれるよう努めます。

創立30周年にあたって

専務理事　西村　徹

わが、ながえ会庄原同仁病院も早や創立30周年を迎えます。

開院当初のことで私が思い出すのは、冬場の水騒動です。この地は高台のため水資源に乏しく、上水道もまだ引かれておらず、高台下にある民家の井戸をお借りしていました。その井戸も、近くに出来たコンクリート工場と共同使用となっていました。ある年の大晦日に貯水タンクが空になり、井戸も空になってしまい、これは大変ということで、当院を建てた建設会社の人に庄原市に折衝してもらって、市の給水施設を使用させていただきました。給水車も貸してくださったので夜遅くまで弟である前事務長と二人で水を運び、やっとタンクを一杯にしてお正月を乗り切ったことを思い出します。

当時の玄関から今の1病棟

私の思い出はともかくとして、病院開設者である父のこと、開設のきっかけとなったことをお話ししましょう。

旧庄原北中学校 校舎

初代事務長である私の父西村馨が昭和46年当時、売りに出されていた庄原北中学跡地を見て、のびのびとしたポプラ並木、桜の見事さに魅了され買うことを決断しました。当初は校舎をあられ製造工場として使用していましたが、構造不況により残念ながら廃業いたしました。その後この地を活かすため緑化事業も検討していたこともあり、その名残で現在も黒松、五葉松、この地には珍しいエゾ松もわずかに残っております。

病院を開くきっかけは、明治44年に生まれ、広島二中、日体大を経て教師をしていたこともある父が、広中学の教え子で医師となった人と歓談中、所謂老人病院の話を聞いたことです。昭和50年代頃も、老親の介護に悩む家庭が多くみられました。もちろん介護保険もなく、一般病院に入れ付き添いを雇うと、金銭的な負担が嵩むので、とても困っているという話が身近にあったものです。それに比べ老人病院は完全看護で支払いも年金で賄えるという話を聞き、これは土地の有効利用もでき、庄原の地域のみなさんのためにも役に立つと考え、前事務長西村雄二と共に奔走し、いろいろな方々のお力添えもあって、昭和62年に開設の運びとなりました。

早や30年になりますが、これからも父や弟の遺志を継ぎ地域のためになるよう努力、精進いたしてまいりたいと思います。

職員募集のお知らせ

お問い合わせ先　0824-72-7300
管理部　山崎まで

看護部より、看護補助の仕事（入浴介助・食事介助など）をして下さる方を募集しています。短時間からフルタイムまで希望に応じた時間で働いていただけます。 子育て中の方や時間にあまり余裕のもてない方、ぜひ、ご相談ください。

栄養課より、調理員さんを募集しています。資格・経験は問いません。元気に明るく一緒に働いて下さる方をさがしています。

読書のすすめ

薬剤師　黒長 隆子

社会人になって、何冊本を読んだか。
全く読んでいない訳ではないが、思い浮かべてみると少ない・・・・
そんな私が、また本に親しむきっかけになったのが以前勤務されていた某先生の「本読んだか。勉強したか。」という言葉でした。

先生の話は大変わかりやすく、面白く、それは膨大な読書量に裏付けられたものに違い有りません。（ロバート・キャンベルさん他、本を読んでいる人の話はわかりやすいと言っています）

先生に触発され（本も貸して下さいました）以来私の読書量も少しずつ増えてきました。　文章の美しさ、描写の素晴らしさを感じたりまた知識を獲得、自分の価値感の構築に役だったり、悩める時どうしたら良いかヒントをくれる等々、本は人生を豊かにしてくれます。

今年度から院内で読書会が始まり、毎回参加しています。
皆さんも本を読んで自分の“話”をしに来ませんか。

新聞委員のつぶやき　～患者さんから見た病院の景色（心の風景）～

伊達信介

10月中旬、今年で102歳になられた女性の患者さんと話をしました。

少し耳元で大きめな声で話をしますが、まったく普通に会話ができる、とても元気なおばあちゃんです。「私はここから見える景色が好きでね」「さざんか、むくげ、桜の木々、ここにやって来る鳥たち、ここから見える空・・・」なんと前向きな言葉だろうか。

長い療養生活、限られた生活空間のなかで、これほど見事に、心の余裕が開花したことに感心させられた。レクリエーション活動に参加するために、車いすを自走するその後ろ姿に向かって、微力ですが、お力添えさせていただきます、どうぞ、これからも健康で、長生きして下さいねと祈った。

四季を通じて季節ごとの花木を患者様が楽しめる様管理しています。

～山ちゃんの旅日記～

看護部　山吉広尚

1ヘクタールに咲く百万本のコスモスは見応え十分です。今シーズンはもう終わりましたが、来年、ぜひ足を運んでみて下さい。

10月10日、岡山の北房IC近くにあるコスモス広場へ行ってきました。

広さは全体で1.6ヘクタール有り、そのうち約1ヘクタールに百万本のコスモスが咲いています。秋にはピンクや白のコスモスが咲き北房の町を彩ります。10月上旬にはコスモス祭りが開催され、近くの店ではシャインマスカットが安く買えますので秋には是非行ってみて下さい。

第33号 ながえの里だより（2017年秋号）平成29年11月1日発刊 庄原同仁病院広報新聞委員会 庄原市川北町890-1 0824(72)7300

Topics .1

川北小学校生徒さんとの交流

元気な歌声に患者さんは聞き入りました

最後は栗のイガも片付けていただき、大変助かりました

10月11日、川北小学校の1学年～4学年の生徒さん11名が来院され、患者さんへ歌や楽器の演奏を披露してくださいました。かわいくて元気な歌声や一生懸命の演奏に、皆さん目を細めて喜ばれ、感激で涙を流されている患者さんもいらっしゃいました。終わりに患者さん一人ひとりに「元気でいてくださいね」「また来ますね」など声をかけながら握手をしてくださいました。小さな手から大きなパワーを頂き、患者さまみなさんいい笑顔になられていました。

交流後は病院の下の栗林で栗拾いを楽しんで帰られました。皆さん上手に栗をイガから拾われてました。

川北小学校のみなさん、元気をいっぱい頂きありがとうございました。

Topics .2

釣り好き会 秋の釣行

誰もやめようとせず、エサがなくなるまで釣りを楽しみました

10月のある土曜日に、釣りバカ1人、釣り好き1人、釣りガール？2人、釣りに興味が少しある人1人、計5名の職員で、島根県浜田市の港へ釣りに出かけてきました。沖に出ると、ヒラマサや鯛、ワカナといった魚が釣れる浜田の港で、今回は誰もが釣れて楽しめるアジとサヨリを狙った波止釣りで半日楽しみました。釣果の方は大漁でしたが、サイズは思ったより小さく少しでもサイズアップを狙ってみんな頑張りました。お昼は、お魚料理をたいらげた後、雨の津和野に立ち寄り、素晴らしく大きな鯉を釣…鑑賞して帰途につきました。

庄原市　長寿のお祝い

10月13日、当院に入院されておられる患者様で、100歳以上になられる方の長寿のお祝いに、木山庄原市長が来院されました。100歳以上の患者様一人ひとりに祝辞をのべられ、表彰状を手渡された後、記念撮影をし長寿のお祝いをされました。当院の最高齢は現在105歳の男性の方ですが、今年、100歳を迎えられる平田若義様は、病院の玄関ホールで、院長をはじめスタッフに見守られながら表彰を受けられた後、、木山市長、ご家族の方とご一緒に金杯・賞状を胸に記念撮影をされました。スタッフはみな、これからも長生きして下さいと心に思いながら表彰を見守りました。

長寿の表彰を受け記念撮影をされる平田様

編集後記

「諦めなどという言葉は私の辞書にはない」この言葉を栞にして、あるスタッフが送ってくれた。元気だったら何ごともできないはずはないのだという強い励ましの言葉だと思うと、胸に込み上げてくるものを禁じ得ません。

季節が廻り、すきま風が、心にまで忍びこんでくる日、ことさら、この言葉が心に沁みる。健康なら、どんなに辛いことがあっても諦めてはいけないのだ。そう思うことにしている。彼女のためにも。

（伊東　亜由美）